

なんくるないざー

水鳥川岳良

【あらすじ】嗣水勝（11）はモヤモヤしている。自分には、生まれてこられなかった姉がいたと父から聞いたからだ。そんなある日、勝は、隣のクラスの転校生・海原渉（12）も姉に対してモヤモヤした感情抱いていることを知り、渉の計画に協力しようと思いつく。

渉の計画は、修学旅行で沖縄へ行き、自由時間に、親の離婚で離ればなれになってしまった姉の結婚式へ出席すること。そこでいまだ言葉にならない姉への思いを伝えること。

勝と友人たちは、作戦を立て、渉と姉を引き合わせるようとする。クラスが違うことによる旅程のずれを入れ替わり作戦でクリアしたり、スマホを使った囮作戦で教師の監視を潜り抜けたりと、勝たちの作戦は順調に進む。

しかし、タクシーでお金が足りず、目的地に着けなくなったことから雲行きが怪しくなる。雨が降り、頼みの綱のスマホは壊れ、仲間たちと喧嘩になる。友人の一人から、付き合いの長い自分たちよりも渉の方が大事なの

かと問われ勝は、とっさに強く否定し、渉を傷つけてしまう。

気まずい空気のまま、なんとか結婚式場にたどり着くが、渉の姉は渉に会いたくないようだ。勝は無理やりにも渉と姉を会わせようとするが、渉は「姉が会いたくないならどうしようもない」「勝たちにとっては何だの遊びなのだから放っておいてくれ」と拒否。

渉は姉に会えず、入れ替わり作戦もばれてしまい、教師に連れ戻される勝たち。その車中で勝は、この作戦は渉のためではなく自分のためだったと告白する。渉が姉に何を語るのか見届けることで自分の中のモヤモヤを解決したかったのだと。でも、今はそんなことは関係なくなっていて、ただ純粹に渡を姉と会わせてあげたいと思っているのだと。

勝の告白に心を動かされた教師の手配で、翌朝、勝たちは渉の姉に会うことができる。勝はその姿をじっと眺める。そうするうちにモヤモヤは晴れていくのだった。

【登場人物】

嗣水（つぐみ） 勝（11） 小学6年生

海原（かいばら） 涉（12） 小学6年生

木村 勇（11） 小学6年生

山本 透（11） 小学6年生

森 光一（12） 小学6年生

今居 独（28） 教師。6年1組の担任

賀家 美空（24） キャビンアテンダント

土井 咲（23） 涉の姉

教頭

2組の担任

運転手

先輩C A

女1 2

○第二小学校・校庭

運動会が行われている。

6年1組と2組が騎馬戦をしている。

紅白帽の白を表にして被った嗣水勝

(二二)を騎手にした、木村勇(二二)、山本

透(二二)、森光一(二二)の騎馬と、紅白帽

の赤を表に被った海原涉(二二)が騎手の

騎馬との一騎打ち。

涉が険しい顔で勝を睨む。

勝は余裕を持って微笑んでいる。

双方の騎馬が衝突し、二つの帽子が宙

を舞って、地面に落ちる。

今居独(二〇)が白い旗を勢い良く上げ、

今居「白組！」

児童たちが歓声をあげる。

勝は満足気に騎馬から降り帽子を拾う。

内側に「6-2土井咲」の文字。

涉が引つたくるように勝から帽子を奪

い、背を向ける。

涉は帽子を握りしめ、震えている。

勝はその背中を見つめる。

透「やったな」

と、勝に帽子を渡す。

勝「(渉を気にしながら) あ、ああ」

と、帽子を受け取る。

勇「これで北海道や」

今居「整列！」

児童たちが整列し始める。

勝は渉の姿を目で追う。

渉はとぼとぼと列に入っていく。

2

○同・昇降口(夕)

靴を履き替えて下校して行く児童たち。
皆、体操服だ。

児童たちの一団が去り、静かになる。

渉がとぼとぼと来て靴を履き替える。

外に出ようとすると、入口の扉に勝が

もたれ立っている。

勝「よう転校生」

渉は一瞬立ち止まるが、すぐに勝の横

を通り過ぎようとする。

勝「そんな沖縄行きたかったんか」

渉は立ち止まるが、勝の方は見ない。

勝「海原」

渉「関係ないやろ」

勝「泣くほど行きたいんか」

渉がキツと勝を睨む。その目には涙が
にじんんでいる。

渉「泣いてへんわ」

勝「土井咲ってだれや」

渉「(少し驚いて) 関係、ないやろ」

勝「ちやうやん。気になってしゃーないねん。

気になって北海道なんて行ってられんわ」

渉が訝し気に見る。

勝「俺、気になるたちやねん」

と、ニヤリと笑う。

○同・体育館

6年2組の児童たちがしらけた様子で
座っている。

隣に座る1組の児童たちは嬉しそう。

前方のホワイトボードに「北海道」と

「沖縄」と書かれた札が貼ってある。

その横に今居が立っている。

今居「じゃあ、約束通り、運動会で勝った1

組に修学旅行の行き先を選んでもらおか

1組の児童たちが歓声をあげる。

2組の児童たちはしらけている。

勝が立ち上がり、

勝「ほんまに俺が決めてええねんな」

勇「当たり前や。勝のおかげで勝ったんやか

ら、勝が決めてくれ」

勝「みんなも、それでええんやな」

透「ええよ、な！みんな」

1組の児童たちが頷く。

勝「ありがとう。ほんなら」

と、ホワイトボードの前まで出て行き、

勝「俺らの修学旅行は」

沖縄の札を取り、児童たちに掲げる。

勝「沖縄や」

児童たちがざわつく。「え」「なんで」「ちやうやろ」「やった」「待って待って」などの声が聞こえる。

透「勝、マジか」

勝「マジや」

勇「北海道言ってたやん」

勝「うん。でも考えてん。ほんまにそれでえんやろか。修学旅行って、どこに行くかよりも、何をすることが大事なんちやうか。北海道で何ができる？美味しいもんは食べれるかもしれん。でもそれだけや。沖縄やったら？泳げる。バナナボートも乗れる。みんなでワイワイできるあくていぐいていが盛り沢山や。せやな、今ちゃん」

今居「え、ああ。でも、北海道でも」

勝「(遮って)ほれみい、先生のお墨付きや。みんな、沖縄で、あくていぐいていを楽しもやないか！」

児童たち、ぽかんとしている。

光一「……」

光一が拍手を始める。

他の児童たちもつられて拍手し、次第に歓声をあげて盛り上がる。

勝がそれを見て満足気に頷く。そして

渉と目が合い、ニヤリと笑う。

飛行機の飛ぶ音が聞こえる。

○沖縄上空

青い空と、エメラルドグリーンの海。

飛行機が飛んでいる。

機内アナウンス「間も無く当機は那覇空港に到着いたします」

○飛行機の中

6年の児童と教師たちの姿がある。

児童たちが歓声をあげる。

窓際の席に座る透が、

透「おい、勝、沖縄見えるぞ」

と、振り返ると、気分が悪そうな勝。

徹「(呆れて)ほんま乗り物弱いな」

少し離れた窓際の席に渉。窓から沖繩本島をじっと見つめる。手には紅白帽が握りしめられている。

* * *

飛行機の降り口。

賀家美空(24)が乗客を見送っている。

美空「ありがとうございます」

勇がやってきて、もじもじと、

勇「お姉さん、彼氏いますか？」

美空「(微笑ましく思い、からかうように)

いないけど、どうして？」

勇「良かったら電話ください！」

と、メモを渡して走り去る。

美空、笑って見送る。メモを見ると、

「どく身教師(28)の電話080-XXXXX」

と書かれている。

機内では、今居が荷物入れから鞆を下ろそうとして、顔にぶつけている。

美空はメモと今居を見比べて、

美空「クソガキめ」

と、メモをくず入れに捨てる。

○守礼門に至る道

児童と教師たちが列になり歩いている。

前の方にいた勇と透が、後ろの方の勝

と光一のところに向かって来る。

勇「なあ勝、なんやここ。つまらん。あ
くていぐいていはまだか？」

勝「まあ落ち着けや、とっておきのあくてい
ぐいていが待つとる」

今居「木村山本、列崩すな」

透「先生、ここどこなん？」

今居「二千円札のところや、ほら見てみ」

と、前方に見える守礼門を指差す。

勇「あほか、二千円札なんてないわ」

今居「お前ら二千円札知らんのか。しよつく」

透「ショックついでに、勇が先生の電話番号
書いた紙、飛行機のお姉さんに渡してたけ
ど、秒で捨てられとったで」

今居「いや、迷惑なことすな」

勇「あとこれ、マツチングアプリ入れといたつたで」

と、今居にスマホを渡す。

今居「え（ポケットを探り）、いつの間に」

と、勇からスマホをひったくる。

今居「何してくれとんねん」

勇「（からかうように）あくていづいていー」

と、前の方に走っていく。

今居は追おうとするが、諦める。

教頭が背後から今居に話しかける。

教頭「（咎めるように）恥ずかしくないんです

か、小学生にからかわれて。教師としての

自覚を持ちなさい」

今居「すみません」

と、うなだれる。

○ホテル・1108号室（夜）

和室に布団が4組敷かれている。

勇、光一がジャージ姿、透がシルクの

パジャマでくつろいでいる。

勇はお土産のお菓子の箱を開けている。
ジャージ姿の勝がバスタオルで頭を拭
きながら入って来る。

勝「(勇を見て) え、お土産もう買ったん？
んでもう食べんの？」

勇「美味しそうやから」

勝「発想が子どもやな」

透「俺ももう買ったで。帰り際バタバタした
ないから」

勝「発想が大人やな」

光一「勝」

勝「まさかモリリンも？」

光一「そろそろ教えてくれてもええんちやう
か」

勇「え、なにになに？」

光一「なんかするねんやろ、明日」

勝「さすがモリリン。でも、ちよつと待って
くれ。その話するには一人足らん」

ドアをノックする音がする。

勝「来たみたいや」

勝が玄関へ向かう。

透、勇、光一は顔を見合わせる。

ドアを開ける音がする。

勝の声「いらっしやい。さあ、これで」

勝が和室に戻って来る。

あとから渉がついてくる。

透と勇がそれを見て驚く。

勇「2組の転校生？」

勝「メンバーは揃った。明日のスペシャルあ
くていづいていの説明を始めよか。名付け
て、『姉を訪ねて三千里作戦』や」

渉「よろしく頼むわ」

と、渉が頭を下げる。

沈黙の後、

勇「三千里って、何メートル？」

透「そこはいつでもええやろ」

と、突っ込む。

○同・1007号室（夜）

ツインの洋室。

今居が机で赤ペンを持って作文をチェックしている。

ドアがノックされ、教頭が入ってくる。

教頭「今居先生、そろそろ見回りに」

今居「あ、はい」

教頭「(机の上の作文を見て) なんですか？」

今居「生徒たちの作文です。チェックが終わってなくて」

教頭「紛失したらどうするんですか！もう、

最近の若い人は。そんなんだから子どもになめられるんです。教師たるもの、ちゃんと子どもくらいコントロールしないと」

今居「すみません」

教頭「見回り行きますよ」

と、部屋を出て行く。

今居、机の上の作文に視線を落とす。

「家族のこと」という題で、「6年1組 嗣水勝」と書かれている。書き出しは「僕にはお姉ちゃんがいません」。

○同・1108号室(夜)

勝、渉、勇、透、光一が輪になって座っている。

輪の中心に結婚式の出欠確認の葉書。

勇「自由行動の時間に海原のねーちゃんの結婚式行くってのはわかったけど。1組と2組で自由時間ちゃうし、商店街から出たらあかんねやろ？」

勝「そこがあくていぐいていや」

透「作戦があるってこと？」

勝、ニヤリと笑い、

勝「まず、昼飯んときにな」

○レストラン

児童と教師たちがカレーを食べている。

今居「1組は午後、先にガマの見学やからな。

自由時間はその後、3時からや」

勝たち、アイコンタクトを取り合う。

勝が頷くと、帽子をかぶった光一が、

光一「(挙手して)先生！うんこ！」

今居「カレ―食つてる時にうんこ言うな。ト
イレ行つてこい」

○男子トイレ

個室が一つ使用中。

光一が来て、その隣の個室に入る。服を脱ぎ、隣の個室に投げ込んでいく。隣の個室からも服が投げ込まれる。

二つの個室の扉が同時に開き、お互いの服を着た渉と光一が出てくる。二人は顔を見合わせ、頷いて帽子をかぶる。光一が、拳を渉に向けて軽く突き出す。渉が不思議そうにそれを見ると、光一は無言でグータッチを催促する。

渉は恐る恐る光一とグータッチをする。光一、「行こう」と合図して歩き出す。渉はグータッチしたこぶしを開いて、手のひらを見る。

油性マジックで「なんくるないざー」と書いてある。

○（回想）ホテル・1108号室（夜）

勝たちが作戦会議をしている。

透「でも喋ったらバレへんか？」

勝「モリリンも海原も無口やから、なんくるないさー」

勇「なにそれ」

光「沖縄弁。なんとななるってこと」

勇「なんとかレンジジャーみたいやな」

勝「ええやん。（ポーズをとり）修学旅行戦

隊・なんくるないざー！みんな、手出して」

と、油性ペンを取り出し、差し出され

た手のひらに文字を書いていく。

全員に書き終わると、渉にペンを渡し、

勝「書いて」

と、手のひらを差し出す。

渉、少しためらうが、書く。

勝「よし、これで」

と、手のひらを突き出す。

勇、透、光一も続き、最後に渉も。

全員の手のひらに「なんくるないざー」

と書かれている。

勝「俺たちは仲間や。海原をねーちゃんに会
わせるぞ！」

勇と透「おー！」

光一は無言で頷く。

渉は、じつと手のひらを見る。

○商店街

渉の手のひら。

「なんくるないざー」と書かれている。

勝の声「海原」

渉が顔を上げる。

勝、渉、勇、透が物陰に隠れている。

勝「第二の関門、商店街からの脱出や」

と、商店街の出口を見る。

今居が暇そうに立っている。

透「全部の出口に先生おるとはな」

勇「どうする？」

勝「うーん。今ちゃん相手なら強行突破でも
いけそうやけど」

透「あとがめんどいで」

勇「緊急脱出作戦使うか？」

勝「それはまだ使いたくない」

涉「（恐る恐る）あのさ」

勝、勇、透が涉を見る。

○商店街・出口

今居が見張りをしている。

勇がスマホを手に物陰から飛び出す。

勇「（スマホを掲げ）今ちゃん！今度は、エ

ロいアプリ入れといたわ」

今居「あ、お前、また！」

勇「ここ置いとくなー」

と、スマホを近くの自販機の下に入れて逃げる。

今居「待て木村」

と、追いかけるが、自販機の前で立ち止まる。勇の逃げた方向と自販機を交互に見て、自販機の前にしゃがみこむ。隙間に手を入れてスマホを探すが、見

つからず、這いつくばって覗き込む。

今居「くそ、よく見えへん」

と、ポケットからスマホを取り出し、
ライト機能で自販機の下を照らす。

今居「……あれ？」

と、手元のスマホを見る。

勇の逃げた方向を見ると、いつの間にか近くにいた教頭と目が合う。

教頭は呆れた顔で今居を見ている。

○タクシーの車内

助手席に透、後部座席に勝、涉、勇。

透はスマホを触っている。

勝「あんなにうまくいくとは。やるな海原」

涉「(照れて) 山本のスマホのおかげや」

透「それだけちゃうよ。よう思いついたであんな作戦」

勇「ほんまやな。(透に) でもスマホ、持つてくんの禁止じゃなかった？」

透「ママが抗議して特別に許可もろた。なん

かあったら責任取れるんか、て」

勇「さすがPTA会長」

透「ま、俺が持っていていきたいってママにお願いしてんけど」

勝「っってお願いしてって俺が頼んだんやけど」

勇「ええ！？」

透「こういうことやってんな」

勝「スマホないと道わからんからな」

勇「なんか、みんなすごいなあ」

と、羨ましそうにする。

勝「勇の演技力かてすごかったで、今ちゃん完全に騙されてた」

勇「(嬉しそうに)せやな！あ、でも演技力言ったらモリリンもや」

透「ほんまや、迫真のうんこ」

勝、勇、透、笑う。

勝「まあ、全部まとめて俺らなんくるないざーの実力ってことや。な、海原」

渉「せやな」

と、嬉しそうに手のひらの文字を見る。

勇「モリリン大丈夫かな。バレてへんやろか」
勝「帽子あるし、喋らんかぎり大丈夫やろ」

○ガマの入り口

6年2組の児童たちが体育座りして、
ガヤガヤとおしゃべりをしている。

その中に帽子を深くかぶった光一。

児童たちの前に、2組の担任と現地の
ガイドが立っている。

2組の担任「ガマの中すごかったね。何か質
問がある人、手挙げて？」

児童たち、急に黙ってそっぽを向く。

2組の担任とガイドが苦笑いする。

2組の担任「えーと、じゃあ……あ、海原く
ん。沖縄に来るの楽しみにしてたよね。何
か質問ない？」

全員の視線が光一に集まる。

光一、帽子の下で緊張の表情。

○空港の更衣室く廊下

美空が私服に着替えている。

私服の先輩C Aが入ってくる。

美空「(愛想良く) お疲れ様ですー」

先輩C A「(不愛想に) 早上がり？」

美空「こっちで友達の結婚式があるので」

先輩C A「ふーん」

美空「ついでに祖母のところに寄ろうと」

先輩C A「そこまで聞いてないけど」

美空「(イラっとしつつ) 先輩は？」

先輩C A「今日の最終便で戻り」

美空「お疲れ様です。じゃあまた同じ便のと

きはよろしくお願いします」

と、キャリーケースと小さなカバンを
手に更衣室を出ようとする。

先輩C A「あんた昨日修学旅行のちびっか
らなんかもらってたでしょ」

美空「ああ。先生の連絡先だって。ちゃんと
捨てましたよ」

先輩C A「(メモを取り出して) お客様の個
人情報なんだから、ちゃんと、シュレッツダ

ー行きのゴミ箱に、捨てなさい。ちゃんと」
美空「（笑顔で）すみません、フオローいた
だいてありがとうございます」

と、メモを受け取り、カバンに入れる。

そのまま更衣室を出て、

美空「（不機嫌な顔で）お局め」

と、つぶやく。

それから窓の外を見て、

美空「うわ、雨降るかな。急ご」

○タクシーの車内

青ざめた顔の勝。

勝「やばい」

透と勇が呆れている。

透「乗り物弱すぎやて」

勝「降りて歩かん？」

透「あほ。タクシーが一番確実や。乗っどっ

たら着くんやから」

勇「なんか、あっさりあくていぐいていクリ

アしてもうたな」

勝「まだクリアちゃう、てか今が一番きつい」

透「まあ、タクシーのおかげでだいぶヌルゲ
ーではあるな」

勝「ぜんぜんぬるくない。一番の難所や」

透「勝うるさい」

勇「俺タクシー初めて乗ったわ。こんなに便利やのに、なんでみんな使わんの？」

透「そりゃ、高いからやろ」

勇「(焦って) え、高いん？俺そんなお金持
ってへんで」

透「まかせとけ、スマホで払える」

勇「スマホすげえ」

運転手「(訛って) スマホ決済できないよ」
一同、運転手の方を見る。

運転手「ごめんね、対応してないんだ」
一同、顔を見合わせる。

○道路

タクシーが走り去っていく。

勝、渉、勇、透がそれを見送る。

勇「昨日お土産買わんかったらなあ」

透「（スマホを見て）まだ結構遠いで」

雲が出てきて、影が差す。

勝「（手を突きだし）なんくるないざー。歩こ。ちょうど日陰になって歩きやすいわ」

雨がパラパラと降り始める。

だんだん強くなり雷も鳴る。

透「日陰ってか雨や！」

勝「屋根あるとこ探すで！」

と、一同走り出す。

透が転んでスマホを落とす。

透「いったあ」

スマホの画面が割れて真っ暗だ。

透の顔が青ざめる。

雨は土砂降りになる。

○お土産屋の軒先

雨が降っている。

店の前のベンチに、びしょ濡れの勝、
渉、勇、透が座っている。

皆、疲れ切った様子で空を見ている。

勝「(透に) ここどのへん？」

透「わからん」

勝「調べてや」

透「無理、スマホ壊れた」

勝「え？」

透、画面の割れたスマホを見せる。

勇「どうする？」

勝「(困って) 道わからんしな。今何時？」

透「壊れてるんやって」

勝「(イライラと) なんや」

透「ママに怒られる。なんて言おう」

勝「(興味なさげに) ごめんって言えば？」

透、不機嫌な表情で勝を睨む。

勝「(嫌味に) 家、金持ちやからいけるやろ」

透「お前が謝れよ」

勝「はあ？」

透「いつもそうや。勝、絶対謝らんやんけ」

勝「悪いことしてへんもん」

透「お前が持って来い言うから壊れたんやろ」

と、勝の体を押す。

勝「人のせいにすんな」

と、押し返し立ち上がる。

透も立ち上がり、勝の胸ぐらを掴む。

勇「ちよ、やめろって」

勝と透が睨み合う。

透「八つ当たりすんなよ。おかしいで勝。なんやねんあくていぐいていて。北海道行こう言ってたのに勝手に沖繩にして。モリリンとは一緒に回られへんし、スマホ壊れるし、なんもおもんないわ」

勝「お前も賛成しとったやんけ」

勇「二人ともやめろや」

透「そんなにあくていぐいていが大事か？遊びやろ？俺らよりこんな転校生の方が大事なんか」

勝「そんなわけないやろ！」

渉、それを聞いて静かに俯く。

勝「俺はただ……」

渉「俺のせいで、ごめん」

勝、透、勇は何も言えずに黙り込む。

勇「……もう帰ろや」

勝「あかん、こいつねーちゃんに会わせるまでがあくていづいていや」

透「あくていづいていはもうええつつーねん」

勝「なんでやねん、大事やろ」

透「なんで？」

勝「なんでて」

勝、一瞬言い淀んで、苦し紛れに、

勝「おもしろいやんけ、その方が」

勇がクシヤミをする。

勇「俺ももう帰りたい。今ちゃんに電話して迎えにきてもらおう」

と、リュックから修学旅行のしおりを取り出す。しかし、しおりもびしょ濡れ。

勇「あかん、番号読まれへん」

透「スマホも壊れてるしな」

一同、途方に暮れてベンチに座る。
店の前にタクシーが来て、停まる。

美空が降りてきて、勝たちを見る。

美空「あれ、君たち」

勇と目が合い、

美空「クソガキじゃん」

○お土産屋・レジ（夕）

お婆ちゃんがレジに座っている。微動だにせず、眠っているようだ。

美空の声「なるほどねー」

奥の襖が開いていて、和室が見える。

和室では勝、渉、勇、透が服と体を乾かしている。

○同・レジの奥の和室（夕）

結婚式の出欠確認の葉書を手にとり眺める美空。

勝たちはタオルで体を拭きながら、美空の様子をうかがっている。

美空「仲いいんだ、君たち」

勝「え？」

美空「だって、修学旅行を海原くん？のため
に使ってるわけでしょ」

勇「ちやうよ、おもしろいあくていぐいていつ
てだけ。(透と勝に)なあ？」

勝「あ、いや」

と、渉の方を見る。

透「(勝に当てつけのように) おもしろいかは
知らんけどな。海原転校してきたばっかや
し、仲良いわけではないな」

渉「……」

と、手のひらの文字を眺める。

文字は滲んでしまっている。

美空、空気を変えようと、

美空「結婚式行ってどうするの？」

渉「どうする？」

美空「お姉ちゃんに会えたとして」

勝「(渉に) 言いたいことあるんやでな」

渉「うん」

美空「何を？」

渉「わからん」

渉、リュックから紅白帽を出す。

渉「うち、共働きやって、ずっと姉ちゃんが俺の面倒見てくれてた。でも親が離婚して、気づいたら姉ちゃんと父さんおらんくて、家に残ってた姉ちゃんの思い出はこれだけやった」

透「……」

渉「ちゃんとバイバイも言えてへん。結婚式
の招待状来たけど、母さんは父さんおるな
ら行かへんって言うし。でも俺、どうして
も姉ちゃんと会いたくて。だからわがまま
言ってみんな付き合わせて」

渉は黙り、紅白帽を握りしめる。

美空「……じゃあ、行こっか。式場」

勇「連れてってくれんの？」

美空「もともと行く予定だったから、ついで」

勝たちが不思議そうに美空を見る。

美空「私、咲の、お姉ちゃんの友達なんだよ」
と、結婚式の招待状を出す。

勝たち、驚いてぽかんとする。

○タクシーの中(夕)

ドレスに着替えた美空が助手席でメイクを直している。

後部座席には勝、渉、勇、透がキツキツの状態で座っている。

美空「咲に会えたら、ちゃんと先生に連絡して帰るんだよ」

透「でもスマホ壊れてて」

と、画面の割れたスマホを取り出す。

美空、透のスマホをちらつと見て、

美空「再起動してみた？右と左のボタン一緒に押してみ」

透が言われた通りにすると、電池切れのマークが表示される。

透「あ」

美空「これ使いな」

と、モバイルバッテリーを渡す。

透、受け取り、チラリと勝を見て、バツが悪そうに充電を始める。

渉「あの、姉ちゃん、ちゃんとご飯食べてま

した？」

美空「んー、私も最後に会ったの2年前とか
だけど、食べてたよ。てかなんだその質問」
涉「そうですね。よかった。姉ちゃん、好き
嫌いひどかったから」

美空「好き嫌いはひどいままだったよ」

スマホの着信音が鳴る。

透がスマホを見ると非通知から着信。

透「なんやろ」

と、恐る恐る電話に出る。

透「もしもし？」

光一の声「やっと繋がった」

透「あ！モリリン？」

○ホテル・ロビー（夕）

ロビーの隅にある公衆電話で光一が電
話している。

光一「なんとか乗り切ったで。そっちは？」

透の声「式場に向かっているところ」

光一「了解。じゃあまだ海原のふりしとくわ」

透の声「あ、なあモリリン。あんな、（言いづらそうに）修学旅行楽しいか？」

光一、受話器を耳から離し、見る。

もう一度耳に当て、

光一「ホンマのこと言うとな」

○タクシーの中（夕）

透たちがスピーカーカーモードで通話中。

光一の声「めっちゃ楽しい。最高のあくていぐいていやん。みんなまじで気づいてへんねんで。俺スパイになった気分やわ」

透、驚くが、すぐに吹き出す。

透「せやな」

光一の声「じゃあ、また後でな」

電話が切れる。

勇「ばれてへんて、さすがモリリンやな」

透「デキる男やで」

と、笑い合う。

渉はそれを横目に、紅白帽をギユツと握る。

勝が不安そうに渉を見ている。

○ホテル・ロビー（夕）

光一が受話器を置いて振り返ると、2組の担任が驚いた顔で見ている。

2組の担任「海原くんのふりつて、どういうこと？」

光一「あ」

光一、しまった、という表情。

○式場・受付く廊下（夕）

女1が受付をしている。

受付の前に美空、勝、渉、勇、透。

美空「だから、咲の弟なんだって」

女1「そう言われても」

女2がやってきて、

女2「美空」

美空「どうだった？」

女2「ちよっと」

と、美空を廊下に連れ出す。

女2 「(声を落として) 咲、知らないって」
美空 「どういうこと? 招待状も持ってたよ?」
女2 「わかんないけど、咲のしたいようにさせてあげよ? 弟くんには悪いけどさ」
美空、考え込むように黙る。

○同・受付(夕)

勝たちが、美空と女2の様子を不安そうに見ている。

勇 「どないしたんやろ？」

透 「さあ」

渉 「……」

渉は俯き、手が震えている。

勝、それを見て渉の手を取り走り出す。

勇 「ちよ、どこ行くん」

透のスマホが鳴る。

透、勝たちを気にしながら電話に出る。

透 「モリリン？」

勇、近づいて一緒に聞く。

○同・廊下（夜）

勝が渉の手を引き、走っている。

勝「どこや海原のねーちゃん」

渉「もうええよ」

勝「良くない」

渉「もうええねん！」

と、勝の手を振り払い、立ち止まる。

渉「もう十分や」

と、リュックから紅白帽を取り出す。

手のひらの文字に気づき、紅白帽で乱

暴に拭いて消そうとするが消えない。

渉は紅白帽を床に投げつける。

渉「付き合ってくれてありがとう。おもしろい

あくていぐいていにならんくて悪かったな」

勝「どうしてん」

渉「姉ちゃんが会いたくないんなら、どうし

ようもないやろ。終わりや」

勝「なんとかなる。俺らなんくるないざーや

ん」

渉「お前らにとっては遊びやもんな」

勝「（一瞬言葉に詰まって）ちやうよ」

涉「（勝を拒絶するように）……」

透と勇が走ってくる。

透「（二人の様子に戸惑いつつ）モリリンがバレて、今ちゃん、こっち向かってるって」

勇「どうする？」

涉「もうなんともならん」

と、俯く。

勝「……」

と、涉を見つめる。

○式場・外観（夜）

日が暮れてうす暗い中、式場の灯りが浮かんでいる。

今居の声「ご迷惑をおかけしました」

式場の前にバンが一台停まっっていて、その側で今居が美空に頭を下げている。

美空「いえいえ」

今居、顔を上げて美空の顔を見る。

今居「……どこかで」

美空「ああ、飛行機で」

今居「(少し考えて) あ、ああ！度々ご迷惑をおかけしまして」

と、深く頭を下げる。

美空「いえいえ。あの、大目に見てあげてください。どうしても海原くんをお姉ちゃんに会わせてあげたかったみたいで」

今居「お姉ちゃん？」

美空「(頷いて) 結局、会えてないんですけど。ご両親の離婚で会えなくなったお姉ちゃんに、言いたいことがあるんだって」

今居「(納得した様子で) それで嗣水が」

美空「(どういう意味だろうか、と) ……」

今居、話すべきか少し悩んで、

今居「嗣水にもお姉ちゃんがいたんです」

○バンの車内(夜)

勝、渉、透、勇が互いに距離を開けて座っている。

勝「俺、みんなに謝らなあかん」

他の三人が視線だけ、あるいは頭を少しだけ勝の方に向ける。

勝「俺な、ねーちゃんおらんねん。でもな」

勝のM「家族のこと。6年1組、嗣水勝」

○（回想）6年1組の教室

黒板に「作文『家族のこと』」と書かれている。

児童たちが一生懸命作文を書いている。

勝は悩んでいるが、何かを決めたように姿勢を直し、書き始める。

勝のM「僕にはお姉ちゃんがいません。でも、

本当はいたそうです。こないだお父さんが教えてくれました」

教室に飾られた花瓶。

花が2本活けられているが、1本は茎が折れ、萎れている。

勝のM「僕のお姉ちゃんは生まれてくる前に死んじゃったそうです。それを聞いてから、僕はなんだかモヤモヤします。僕、気にな

るたちやから」

○（回想）勝の家・リビング

扉が開いて勝が入ってくる。

勝「ただいまー」

勝の母は机でぼーっと宙を見ている。

勝のM「お母さんがぼーっとしている時、お姉ちゃんのことを考えてるんじゃないかって考えるようになりました」

○（回想）スーパー

小学生ぐらいの少女とその母が楽しそうに買い物をしている。

勝の母がその後ろ姿を眺めており、勝はそれを見ている。

勝のM「本当は、僕じゃなくてお姉ちゃんに生まれてきて欲しかったんじゃないかって」

勝は下唇を噛み、複雑な表情。

勝のM「そう思うと、なんかモヤモヤして、会ったこともないのに、お姉ちゃんに腹が

立ってきました。なんで生まれてきてくれんかってん。生まれてきてくれな、文句の一つも言われへん。喧嘩もできへん。多分、僕、言いたいこといっぱいある。でも、お姉ちゃんはいません。だから、なんて言いたいのかもわかりません」

○（回想）公園（夕）

勝と渉がブランコに座っている。

渉「だから俺、姉ちゃんに会って、言いたいことあるねん」

勝、渉に「なんて？」と聞きかけて、やめる。

代わりに立ち漕ぎを始め、

勝「じゃあ会いに行こ」

渉「ええんか？」

勝「俺、気になるたちやから」

と、ニヤリと笑う。

勝のM「僕はお姉ちゃんに、なんて言ってるたいんやろ」

○バンの車内(夜)

渉たちが勝の話に耳を傾けている。

勝「だから、海原がねーちゃんになんて言うんか知りたかってん。そしたら、俺のモヤモヤもなくなるんちゃうかって。あくていぐいていとか調子いいこと言ってたけど、全部俺のわがままやってん。ごめん」

透「……最初から言えよ。あほ」

勝「ごめん」

渉「勝手すぎるやろ」

勝「ほんまごめん。でもな、さっきは、今も、そんなん関係なく、あくていぐいていも関係なく、海原をねーちゃんに会わせたいって思ってる。俺ら……全員でなんくるないざーやから」

勇「みんなでここまできたもんな」

透「それはそうやな」

渉「もうなんともならんけどな」

と、手のひらを見つめ、滲んだ文字を大事そうに握る。

勇「そや海原、これ、落としとつたで」

と、紅白帽を渡す。

渉「（驚いて）ありがとう」

と、受け取る。

○式場・外観（夜）

今居がバンにもたれかかって車内の話を聞いている。

タイミングを見計らい、ドアを開け、

今居「さ、ホテル戻るで」

と、バンに乗り込む。

○道路（夜）

綺麗な星空。

勝たちを乗せたバンが走っている。

○バンの車内（夜）

今居が眠そうに運転している。

勝、勇、透は眠っている。

渉はその三人を見て、持っていた紅白

帽と、手のひらの滲んだ文字を見る。
紅白帽をリュックにしまい、眠る。

○式場・新婦控室（夜）

ウエディングドレスの土井咲（23）が
化粧台の前に座り、鏡を見つめている。
扉がノックされ、美空が入ってくる。

咲「ごめん、呼び出して」

美空「こっちこそ。余計なことしちやって」

咲「ううん。あの子、ちゃんとご飯食べてた？」

美空「……」

咲が不思議そうな顔をする。

美空「同じこと聞くから。食べてるところ見て
ないけど、やつれたりはなかったよ」

咲「そう、よかった。あの子好き嫌いひどく
てな」

美空「それもおんなじ」

咲、美空の方を向いて少し笑う。

美空「どうしてって、聞いてもいい？」

咲、鏡の方を向いて、

咲「たぶん恨まれてるから」

美空「(え、と)……………」

鏡越しに美空をちらつと見て、

咲「あの子いじめられてて、友達おらんくて。」

私を守ってあげるって言ってたのに、約束破っちゃったから。ひとりぼっちにしちやったから」

美空「別にそれは、咲のせいじゃ」

咲「私、ホツとしちやってんあの時。あの子の世話ずっと私がしてたから。これで解放されるって。ひどいやろ？だから、あわせ顔がない」

美空「恨んでる人に会うために修学旅行抜け出したりなんてしないよ」

咲「そうやね。でもよかった。友達できたんやね」

と、少し寂しそうに笑う。

美空、その表情を見て、

美空「……………」

○同・廊下（夜）

新婦控室から美空が出てくる。

大きく息を吐き、何かを考える。

ハツとして、鞆を開けて何かを探す。

そして、「どく身教師（28）の電話 080-

××××」と書かれたメモを出す。

○ホテル・ロビー（夜）

今居が教頭に説教されている。

教頭「教師としての自覚が足りないからこん

なことになるんですよ」

今居「すみません。おっしゃる通りです」

今居のスマホが鳴る。

今居「すみません」

教頭「こんな時間に、緊急かもしれないし出

たらどうです？」

今居「あ、はい」

と、電話に出ながら教頭から離れる。

今居「もしもし？あ、先程はどうも。あれ、

なんで番号（知ってるんですか）」

○式場・外観（夜）

式場の入口で美空が電話している。

美空「あの二人、今会わないと、もう一生会わないんじゃないかって。なんとかしてあげられないでしょうか」

○ホテル・ロビー（夜）

今居がお土産コーナーの近くから、離れたところにいる教頭を気にしながら電話している。

今居「そりやなんとかしてあげたいですけど」と、教頭の方を見る。教頭は不機嫌な顔で今居を見ている。

美空の声「そうですよね。すみません、無茶言ってます」

今居「いえ」

と、お土産コーナーに置いてあるTシャツが目に入る。
Tシャツには「なんくるないさー」と書かれている。

勝のM「そんな関係なく、海原をねーちやんに会わせたいって思ってたん。仲間やから。」

全員でなんくるないざーやから」

今居「(ボソツと) なんくるないざー」

美空の声「え？」

今居「なんとかします」

教頭の方を見て、

今居「教師として」

○ホテル・1108号室(早朝)

勝、勇、透、光一が眠っている。

襖がゆっくりと開き、今居がそつと入ってくる。

今居「(小声で) おーい、起きろ」

勝「(寝ぼけて) 今ちゃん、うるさい」

今居「起きろって、なんくるないざーず」

勇「(寝ぼけて) はい！なんくるないざー！」

と、立ち上がり、手を突き出す。

今居「(焦って) しー！」

と、自分の口の前に人差し指を立てる。

○ホテル・外観（早朝）

ホテルの前にバンが止まっている。今居が、眠そうな勝、勇、透、光一を連れてバンの方に歩いてくる。

勇「なあ、どこ行くん。朝ごはんまだやる？」

今居「シャキツとせいシャキツと」

と、バンのドアを開けると、中には渉。

今居「全員揃ったな、なんくるないざーず。

あくていぐいていの続きに行こか」

勝、勇、透、光一が驚いて今居を見る。

透「今ちゃん、『ず』はいらん」

今居「（え、と）……」

勝たち、思わず吹き出す。

教頭の声「今居先生？」

一同、振り向くと教頭が立っている。

教頭「（不機嫌に）何してるんです」

と、近づいてくる。

今居「あ、いや、その」

勝たち、「どうする？」と顔を見合わせる。

光一「緊急脱出作戦や」

透が光一を見て、一瞬悩んでから頷く。

教頭「なんですか、こんな時間から」

透「教頭先生、なんかお母さんがめっちゃ怒ってて、先生にかわれって」

と、スマホを渡す。

教頭「え、お母様が？（電話を受け取り）もしもし？」

と、勝たちに背を向けて話し始める。

教頭「いつもお世話になっております。どうかされましたでしょうか？…山本さん？

…あの、なにか、ありましたか？」

教頭、違和感を覚えスマホの画面を見ると電話はつながっていない。

振り向くと、バンの扉が閉まる。

教頭「ちよつと、待ちなさい！」

バンは走り出す。

○バンの車内（早朝）

今居と勝たちが乗っている。

勝「(透に) 良かったんか？」

透「もうちよい付き合ったるわ。お前らのわがままに」

勇「(嬉しそうに、勝と渉に) 仲間やからな」

今居が微笑んでいる。

腕時計を見て、真剣な顔になって、速度を上げる。

○空港・ロビー(早朝)

美空と咲が話している。

近くに咲の夫が大きな荷物を持って立っている。

美空は周囲をしきりに気にしている。

咲「ええのに見送りなんて」

美空「いいのいいの。どうせ今日出勤だから。

ちよーっと早めに来ただけ」

咲「ほんま？ありがと。じゃあ、そろそろ」

美空「(焦って) ああー、もうちよっと、いいんじゃない？搭乗手続きそんなに時間かからないよ」

咲「でも乗り遅れたら嫌やし」

美空「んー、いやー、そのー」

と、周囲を見渡すが、目当ての人物たちはまだいない。

美空「記念撮影しよ、みんなに送るし」

と、スマホのインカメラで自分と咲のツーショットを取ろうとする。

咲「いや、なに」

美空「(ぎこちない関西弁で)ええからええから」

美空のスマホの画面に、咲と美空が映っている。その背後に今居が勝たちを連れてやってくる姿が映りこむ。

美空、それに気づき、

美空「(わざとらしく)あ、あー！」

と、指をさす。

渉と咲が互いに気づき、目が合う。

渉、その場から逃げようとする。

勝が渉の腕を掴んで、引き留める。

渉「(え、と)……」

勝、手を放し、手のひらを渉に見せる。

透、勇、光一も同じように手のひらを見せる。

渉、それぞれの顔を見て、頷く。

そして咲の方に進み出る。

咲「人参、食べれるようになった？」

渉「……」

咲、「ごめん」の言葉を飲み込み、

咲「会いに来てくれてありがとう」

渉「……」

渉、ゆっくりと口を開き、

渉「あほー！（大きく息を吸い直して）あほ

ー！姉ちゃんのあほー！あほー！」

と、咲に走り寄り、抱きつく。

咲も抱きしめ返す。

渉「会いたかったわボケえ！」

咲「うん、うん」

渉「結婚おめでとー！」

咲「（笑って）ありがとう」

勝たちがその様子を見ている。

勇「(少し笑いながら) あほー、やって」

透「よかったな、海原」

光一が無言で頷く。

勝はじっと渉と咲を見つめている。

今居が勝の頭に優しく手を置く。

勝「手を払いのけて) やめや気色悪い」

今居「気色悪いて」

勝「(涉たちから視線を逸らさず) 今ちゃん」

今居「なんや」

勝「ありがとうな」

今居「(嬉しそうに) おう」

勝「また教頭に怒られるんやろ」

今居「お、おう」

勝「最高のあくていぐいていや」

今居、満足げに微笑む。

飛行機の飛ぶ音が聞こえる。

○大阪上空(夕)

夕焼けが空を染めている。

飛行機が飛んでいる。

機内アナウンス「間も無く当機は関西国際空港に到着いたします」

○飛行機の中（夕）

ほぼ満席の機内。

6年の児童たちと教師たちの姿がある。制服姿の美空がゆつくりと歩き、機内を見回っている。

「なんくるないさー」と書かれたTシャツを着た勇が他の児童とトランプをしている。

同じTシャツを着た透がスマホを操作している。

光一も同じTシャツを着て、備え付けのヘッドホンで何かを聴きながら、備え付けの雑誌を読んでいる。

渉も同じTシャツを着て窓の外を眺めている。

今居が隣の席の教頭に説教されている。

教頭「だから教師というのはね」

美空が近くを通り、今居と目が合い、
会釈し合う。

教頭「聞いてますか？」

今居「はい！」

美空、その様子を見てほほ笑み、見回
り続ける。

「なんくるないさー」のTシャツを着
た勝が眠っている。乗り物酔いで気分
が悪そうだ。

勝「(寝言で)ねーちゃんの、あほー」

と言うと、気分が楽になったようで、
ニヤリと笑う。

よく見ると勝のTシャツの文字は、「さ」
に手書きで濁音がつけられ、

「なんくるないざー」になっている。

《おわり》